2019年 令和1年 8月 136号

難局を乗り切る力

医薬経済社
坂口 直

「1×15=100」。一見すると、何かの謎解きのようだが、これはこれで正解だ。現在ＴＢＳで放送中の日曜劇場「ノーサイド･ゲーム」第２話で､「選手をどう活かすかで､15 が 100 にもなれば 0 にもなる」という監督のセリフの下りで書かれた数式だ（ラグビーは１チーム１５人でプレイする）。同ドラマは左遷されたエリート社員が、低迷する社会人ラグビー部の再建をめざす物語だが、目頭を熱くする諸兄姉もいるのではないだろうか。かくいう私も学生時代に楕円球を追いかけていた手前、毎回こみ上げてくる。なかでも大雨の中、スーツ姿でタックルバッグ（ボクシングのサンドバッグのようなもの）にぶつかっていくシーン（第１話）は圧巻だった。出世コースから外れたサラリーマンの悲哀と覚悟が感じられた。

日本でのラグビーW杯開催を９月に控えるなかで、同ドラマは世間にラグビーへの関心を持ってもらう援護射撃となるだろう。１５年のW杯で日本代表は強豪南アフリカに大金星を上げ、「五郎丸ポーズ」が一世を風靡した。そこからじわじわと注目を浴びだしたが、過去には世界トップのニュージーランドに１００点以上もの得点差をあけられ、惨敗したこともある。当時はあまりの海外との格差に人気も低迷したが、それでも世界に対抗しようと日本代表の監督、選手たちはもがいた。１５年W杯の日本代表には非日本人の選手も多く、主将は日本人に帰化したリーチ・マイケル選手が務め、国際色の強さに面食らった人々もいたかもしれない。しかし、この国際化は故平尾誠二氏が９９年W杯で外国人選手を主将に起用していた頃から始まっており、それがようやく南アフリカ戦の勝利へとつながった。

どん底からの這い上がりは､かつてのジェネリックの歴史を彷彿とさせる。一昔前は「ゾロ」と蔑まれ、業界全体が肩身の狭い思いをしてきた。ところが、平成後期に政府がジェネリック使用促進に舵を切ると、一気に数量シェアを拡大。ジェネリックの名称も定着してきた。おそらく人知れず先達が取り組んできた活動が結実したのだろう。ただ問題はこれからだ。数量シェアが８０％に届いたとしても、毎度頭を悩ます薬価改定に加え、近年は安定供給に絡んだ原薬確保が課題となっている。あるいは売上げに結びつく大型品の特許切れがなくなりつつあり、各社はＡＩや働き方改革など時代の潮流にも対応しなければならない。

W杯後のラグビーもジェネリックと同じ難局に直面する｡W杯の熱が冷めた後、いかに人気を維持で

きるかが問われる。数量シェアが８０％に到達したジェネリック業界も、業績を維持、あるいは拡大していくための新たな方策が必要になってくる。状況は厳しいかもしれないが、経営者の戦術と、それに応える社員の熱意次第ではその力は１００にも０にもなる。